

# 哲學研究

第二十七號

第三卷  
第六冊

## 感覺

西田幾多郎

### 一

精神現象は通常縦に知情意と分ち、横に精神的要素と其結合とに區別する様である。其結合には直覺的なるものと意識的なるものとを區別することができる。例へばソントの精神的化合物と聯想及統覺との區別の如きものである。縦の區別は精神現象の性質的區別といふべく、横の區別はその單複の程度的區別といふべきである。横の區別に於て從來の心理學では精神現象の意味内容に對する價值的見方を混へたと思はれるが、現今の實驗心理學では全く自然科学者が自然現象に對すると同一の態度を以て精神現象に對しようとする。従つて心理學的研究に於ては一

切の價值的見方や概念の實體化的傾向を去らねばならぬ。セントが主知主義の心理學を排斥するの之に依るのである。氏に従へば、聯想心理もヘルバルトの「表象」も要するに表象の實體化を免れないので、氏の所謂主意主義の心理學は「精神現象」を何處までもその具體的狀態に於て見ると云ふのである。氏の「精神現象の區別」も此見方に基けるものであらう。併し「精神現象の本質を形成する」と思はれる意味的關係を棄て、精神現象の深い理解ができるものであらうか。「精神現象の深い理解」は内省的考察に依らねばなるまい。「精神現象の分類」に於ても斯く云ひ得るであらうと思ふ。

精神的要素 *psychische Elemente* とは如何なるものであるか。セントの云ふ所によれば、一つの要素 *a* が第一の場合に於て *b c d* と共存し、第二の場合に於て *b' c' d'* と共存するならば、*a* なる要素を獨立と考へることができる。例へば一つの音が或時は或方向に、又或時は他の方向に聞かれ、又或時は或音と共に、或時は他の音と共に聞かれた場合、此音を抽象して一つの要素と考へるとができるといふのである。精神的要素とは此の如き分析を何處までも進めて得たる結果である。此の如き分析の仕事は化學者が化合物を分析すると何等の變もない様であるが、精神的要素とは物質

的要素の如く獨立せる實體ではない、或人の意識として即ち "einem Bewusst" としての實在性を有するのである。單に經驗内容を區別するといふのみではその區別せられた經驗内容を客觀的と考へることもできれば主觀的と考へることもできる。區別せられた一種の音が時と場所との關係を離れ、單に他の音に對して己自身の性質を維持する點に於て一種の客觀的存在と考へることもできる。今日の物理學では音を空氣の振動と考へるのであるが空氣の振動といふのも、要するに右の如き考へ方によつて經驗内容を客觀化したものに過ぎない。或一つの表象的經驗に就ても、ポルツァーノ學徒の考の様に三つのものを區別せなければならぬ。即ち主觀的作用としての表象、表象自體及び之に對する客觀的存在との區別をすることができ、獨立として區別せられた一種の經驗内容が感覺として精神的要素と考へられるのは、或個人の意識として意識統一に屬するものとしてでなければならぬ。或經驗内容が一つの意識中心に屬するといふのは如何なることを意味して居るであらうか。意識せられるといふことは意味が直接に働くといふことである、意味と意味との關係が直に實在的となるといふことである、*substantiöse Tätigkeit* 即ち本體なき働きてある。我々が内界經驗といふのは此の如き統一の範圍を指すに過ぎない。經驗内容

(7) の變化が内面的必然の理由に依らずして、少しでも外から動かされたと考へられる時、もはや精神現象ではなくして、物體現象と考へられねばならぬ。青い色が赤い色に變化した場合、我々は之を青いものが赤いものに變つたと云へば物體現象となるか、斯く考へられる前に色は色自身に依つて互に區別せられねばならぬ、これが意識現象である。物體現象に於ては、性質は隠れた本體の性質として實在性を有するのであるが、意識現象に於ては性質其物が實在性を有するのである、意識は主體なき實在である。布伦ターノがスコラ學者に倣ふて、精神現象の特徴を *die intentionale Inexistenz eines Gegenstandes* 即ち *immanente Gegenständlichkeit* となすのも同一の意義である。對象といふのは外界の實在であつてはならぬ、外界の實在が精神内に入り様はない、要するに意味である、經驗内容を意味するのである。對象の内在とか内在的對象性とかいふことは要するに意味が働くといふことに外ならない、意味が内にあるとか外にあるとかいふのではない、意味か生きて居ると云ふことである。意味が其れ自身で實在となるのが意識現象である、或人に意識さるといふのは此の如き意味の共存的關係 *compossible relation* に入込むことに過ぎない、或人とは此の如き關係の中心である。

我々の直接經驗に於ては、一々の經驗内容が實在であり力である。例へば一種の線とか色とか云つても、藝術家の眼には直線はその各點に於て *eine Durchdringung der Geraden und der Kurve* である。すべての色は *eine Tendenz nach Weiss und Schwarz* を含んで居る。加之一々の線や色やそれ自身に固有なる感情を有つて居るのである。直接の經驗に於てはその一々の點が意味の共存的關係 *compossible relation* である。此故に多くの人々の云ふ如く意識現象が直接の具體的經驗である。一々の内容が即作用となり主體なき働きなるが故に、意識現象は内界經驗である。意識現象を右の如きものとして之れを分析して意識的要素を得ようとするには、何處やでも右の如き立場を守らねばならぬ。赤とか青とかいふものが或物の性質としてでなく、それ自身に於て實在性を有するものとして見られねばならぬ。此處に物理的分析と心理的分析との區別がある。物理的分析に於ては赤いもの、青いもの、鳴るもの、響くものとして之を實質的に分つのである。所謂分割 *partition* である。心理的分析は之に反し、此等の性質其物を實在として、之を區別するのである。心理現象は本體なき性質、働くものなき働きである。物體の原子は空間に於ける不可入性 *Undurchdringlichkeit* に於てその實在性を維持するが、精神的要素は區別性 *Unterscheidbarkeit* に依つてその實在性を維持

すると考へられるのも之に依るのである。物質的要素の獨立を維持する爲め空間的關係といふものが考へられ、その相互の變化を説明するため物力といふ如きものが考へられる如く、精神的要素の成立する舞臺として意識といふ如きものが考へられ、その相互の關係を説明するため種々の意識作用が考へられるのである。區別性 *Unterscheidbarkeit* も意識の一作用と考へられるのであるが、經驗内容がそれ自身によつて互に相分つことが直にその區別性である。 (*Unterscheidbarkeit* とは内容自身が力を有つことである)。かゝる場合之を實體概念 *Substanzbegriff* に依つ赤いものとか青いものとかいふ様に考へるから、此の如き本體と現象と互に相分離し、之を統一するため空間といふ如き外面的形式が考へられると共に外面的作用たる物力といふものが考へられるのである。之に反し現實概念 *Aktueller Tätigkeitsbegriff* によつて内容其物を實在と考へることから、或人の意識といふ如き内面的關係の形式を生じ、意識作用といふ如きものが考へられるのである。精神現象と物體現象との分れるのは經驗内容を實體概念 *Substanzbegriff* によつて考へるか、現實概念 *Aktueller Tätigkeitsbegriff* によつて考へるかに依るのである。一つは經驗内容の背後に  $x$  を考へることに依つて統一し、一つは統一を經驗内容其物の中に求めるのである、即ち内もなく外もなくゲーテの云つ

た如く *beides mit einem Male* である。我々が意識作用として考へるものは現實概念の種々なる範疇である、識別作用といふのも其一に外ならない。

實體概念と現實概念との關係は根本的には之を「甲は甲である」といふ自同律の體験に於て求めることができる。考へられた「甲」が實體概念の基となるのであるが、此の如き思惟對象は判斷作用の體験と離れて考へることはできぬ、後者の體験が現實概念の基となるのである。後者に於ては一即多であつて、内容其物がそれ自身に於て變化するのである、即ち一層具體的な實在の形式を取るのである。識別作用とは體験内容其物の此の如き内面的發展である。カントは *Analogien der Erfahrung* に於て *Grundsatz der Substanz* より *Grundsatz der Kausalität* に行き、更に後者より *Grundsatz der Gemeinschaft* に至つて居るが、ヘーゲルの論理に於て示説される如く、*Gemeinschaft* 即ち *Wechselwirkung* の極は内面的必然の因果律即ち意味の實在に達せねばならぬと思ふ。ロッチェが相互作用を實在の形式と考へることから遂に精神現象を實在となす唯心論に達せざるを得なかつたのも同一の理由に基くのである。此故に精神現象に於てはいつでも統一が實在であり、全體が實在であるのである。

物體現象と精神現象との區別を右の如く考へ、前者は實體概念に依つて現象の背

後に隠れたる或物を考へると云はば、多少の誤解を受けるかも知らない。今日の物理學者は現象の背後に不可知的なる何物をも考へない、因果關係といふものは現象と現象との間に於ける函數的關係に過ぎないと考へられて居る。余も勿論之を知らぬのではないが、これが爲に精神現象も物體現象も同一性質の函數的關係によつて考へ得ると思ふならば、それは大なる誤であらう。物理學に於ける如き函數的關係の考へられるには先づ經驗内容が量化せられねばならぬ。量的に考へるといふのは之を外から統一することである、經驗内容を純粹思惟の對象と變ずることである、經驗内容を離れて見ることである。内容を離れるといふことは之を無視するといふのではないが、内容の變化を他の語によつて言表すのである。勿論自然科學的知識は必ずしも數學的なるを要せない、單に經驗的法則 empirical laws の程度にあるものも多い。併しこの場合に於ても、我々は之を單に經驗内容の性質的變化の法則とは考へない或性質を有つた物と物との關係と考へるのである。精神現象に於ては之に反しその變化は全く内容其物の變化でなければならぬ、従つて純粹に性質的と考へられるのである。經驗内容を對象化して「赤いもの」と云へば、内容は物の性質となり、赤の感覺と云へば性質其物が實在的となるのである。併し嚴密に云へば意識



現象が性質的であるといふのは尙實體概念の考へ方を脱して居ない意識現象とは経験内容の純なる動的状態である。或一つの経験内容が他の束縛を脱してそれ自身の自由に還つた時、即ち自覺した時、それが精神現象であるのである。或は精神現象も之を反省して見た時、既に我々の認識對象の世界に屬し、他の自然現象と何等の區別もないと考へる人もあるのであらう。併し余は内容を物の性質として考へるのと内容自身を實在として考へるのとは、その間に相違があると思ふ。無論以上の如く論ずるものの意識現象を意味の實在として物體現象から區別せられると共に、單に意味といふ如きものと區別せなければならぬ。我々の感覺とか思惟とかいふものと表象自體とか命題自體とかいふものとは同一ではない。精神現象は一種の實在である單なる内容ではなくして働く内容である。精神現象の心理的分析と意味の分析とはその性質を異にすることは云ふまでもない。

## 二

普通には感官に依つて種々の感覺を區別するかの様に見えるが、感官が精神現象の區別の基となるのではない。心理學者は嚴密に経験内容其物の性質によつて精

神現象を區別せなければならぬ。色と音とはその眼によると耳によるとに關せず、經驗内容其物の性質に於て全然相異なつて居るのである。心理學者は嚴密に右の如き立場を守つて、我々の經驗内容を分析し所謂精神的要素に達するのである。斯くして今日の心理學に於て、先づ光覺、音覺、香覺、味覺、壓覺などに大別し、更に一々の覺に就て精細なる區別が立てるのである。光覺の如きに至ては其數三萬五千を下らぬと考へられる(Fitchener)。此等の區別は何處までも經驗内容其物として考へられたのであつて、外界刺戟の性質によつて考へられたのではない。例へば灰色は白と黒との混合であり、莖や紫は赤と青との混合であるかの様に考へられるが、嚴密なる心理學の立場に於ては、かゝる考を許すことはできぬ。灰色は白や黒と同じく單一なる感覺である、橙黄や紫は赤や黄と同じく單一なる感覺でなければならぬ。唯、白と黒といふ如き著しき對立をなすものが *Orientierungspunkt* として擇ばれるまでである。ザントのいふ如く一々が性質的單位 *qualitative Einheiten* でなければならぬ。その背後に何等かの外界的統一を考へればもはや精神現象ではなくなるのである。併し單に性質的單位といふのみにては、所謂表象自體の如きものと區別することはできない。精神現象の本質は内容其物が働くにあるのである。即ち内容其物が

力を有するにあるのである。余はフエヒネルの感覺的識別 *sensible discrimination* の如きものが單一なる内容其物の働く形式であると思ふ。物體現象の要素たる原子間に於て物力的關係を考へる如く、精神現象の要素たる性質的單位は互に識別的關係に於て立つと考へねばならぬ、單なる性質的單位ではなくして感覺も一々 *funktionelle Einheiten* でなければならぬ。内容其物が内容其物として純粹にそれ自身から働くのが識別作用である。精神要素とは識別力を有つた表象自體である。ヘルバルトのレヤーレンとは此の如きもの本體として考へられたものであらう。キェルペの云ふ如く、識別は内容の外に立つ比較の能力ではなす、唯 "We have different experiences and experience them differently" とすふことである。我々が同一の經驗内容から出立して一方に物體界を構成すると共に、一方に精神界なるものを構成するのであるが、その第一歩は識別の範疇である。識別は内面的作用の初級である、感覺と識別とは離すことのできない概念である。我々の精神が感覺に於て物體と接すると考へられるのはそれが一方に於て物體界の構成に向ふに反し、一方に於て精神界の構成に向ふ出立點なるが故である。勿論感覺的識別に於ては内容は尙 *Aussererinander* の状態に於てある、ヘーゲルの語を以て云へば統一が消極的である。併し物體現象に於ては内容

は全く無力であるが、感覺としての内容は内容其物が力を有つて居るのである、即ちそれ自身の中に統一の可能性を有つて居るのである。ライブニツがすべての表象が complex であるといふのは此故である、小知覺に於てはすべてを含むと云つてよいのである。我々は直接の經驗に就て種々の内容的本質 Wesen を區別し、一方に之を對象化して物の性質と考へると共に、一方に之をその原形に於て感覺と見るのである。動的靜靜的動なる具體的經驗は孰の點に於ても此兩方面を有つて居る、甲は甲である」と云ふ自回律の判斷に就て見ても、その「主語甲」と「述語甲」との對立の状態が識別の状態であり、かく見られたものが意識内容即ち感覺である、之に反し「同一的甲」が物である。

表象自體は直に精神的要素ではない、感覺とは表象自體がそれ自身の中に識別力を有つたものである。單なる表象自體の研究はマイノングの所謂 *Wesen* の學即ち對象論となるであらう、心理學は内容を識別的關係に於て見たものでなければならぬ。此意味に於て心理學は作用の學である。此の如き識別作用を影響するものは心理學に於て感覺論の研究對象となる。例へばキルペのあげた(1) *attention* (2) *expectation* and *habituation* (3) *practice and fatigue* の如きものである。若しマイノングが „*Bemerkungen*

über die Farbenkörper und das Mischungsgesetz" に於て云つた様に、意識の中にも先驗的部  
 分があり、色の先驗學と云ふ如きものが成立し得るとするならば、色其物の性質的關  
 係の研究は心理學ではない。心理學の問題とは色の性質を何處まで識別し得るか  
 とか、此識別を如何なる原因が如何に影響するかといふ如きものでなければならぬ。  
 恰も幾何學は純粹直觀の學として心理學と全くその基礎を異にするものであるが、  
 種々の線や形の意識の問題が心理學に於て論ぜられるのと同様である。勿論幾何  
 學と同一の程度に於て色の先驗學といふ如きものの成立することは不可能であら  
 うが、アプリアオリといふのはプラトールのイデアの如く經驗の構成力であるとすれば、  
 色の經驗の根柢にも此の如き一種のイデアを認めることもできるであらう。少く  
 とも色自體と色の意識とを區別して考へることができる。若し右の如く考へるな  
 らば純粹の心理學的研究對象とは如何なるものとなるてあらうか。前に擧げた感  
 覺を支配する三條件の如きは生理的心理學の研究を進むれば生理的原因に還元せ  
 られてしまふかも知れない。所謂心理學的研究は一方にマイノングの對象論の如  
 きものに進むと共に、一方には生理學の如きものに還元せられると考へることもで  
 きる。感覺的識別の背後には一方に判斷といふ如きものを考へることができると

共に、一方には自然科學的因果を考へることができ、識別とは此兩者の接觸點である。意識の領域は對象或は本質が何處まで存在と結合するかによつて定まる、我々の光覺に三萬五千あるといふのは此程度を示したものとなる。勿論此の如き意識作用の範圍が生理的條件によつて限定せられ、其變化が生理作用によつて支配せられると考へるならば、意識は全く身體の附屬物としてそれ自身の實在性を失ふこととなるのであるが、内容それ自身が力たる意識の內面的因果は所謂物體的因果よりも根本的である。ライブニッツ以來唯心論者の考へた如く意識の統一の上に物體界が成立つ、內面的因果の上に外面的因果が成立つ、內面的因果の底は我々の理智の錘の達することのできない深みである、*durée pure dure, durée interne*である。或は此經驗を反省し分析すれば、フッサールの本質的關係といふ如きものに還元することができると云ふてもであらう、併し *real* は *ideal* の單なる和ではなく、*compossible* は *sum of possible* に或物が加はらねばならぬ、而して此處に加はるべき物は我々が人格的といふ語によつて理解する或物である。余が嘗て云つた如く人格とはアブリオリの結合である、可能なるものの共立的關係である。認識對象となることのできない限定することのできない人格的或物は或は無内容なる概念とも考へられるであらう。認識對象

となり得るものは盡く所謂本質的關係の中に入り、然らざるものは認識することはできない。意識の因果に就ては何等の豫期を有つことはできぬ。此缺陷を充すため生理的因果が考へられるのである。併し物體現象を統一する自然科学的因果關係も之を分析すれば本質的關係に還元せられ、物とか力とかいふのはその背後に考へられた不可知的或物である。我々は二様の共立的關係を考へる。一つは人格的統一の上に於ける共立的關係であつて、一つは物體的統一の上に於ける共立的關係である。併し後者は前者を假定して其上に立つ、後者は思惟作用と名づけられる一主觀的作用の對象界に過ぎない。我々の意識界といふのは之に反し一層具體的なる見方の對象界である。意識統一は無内容と考へられるのであるが、我々は對象を意識すると共に之を意識することを意識するのである。此點に於て意識の統一は物體的統一より積極的である。識別といふのも此の如き人格的統一の初級である。

普通の心理學に於ては感覺の性質といふものが論ぜられるのであるが、色其物とか音其物とかいふものの研究は恐らく心理學の研究範圍でない。畫家の色に對する態度、音樂家か音に對する態度は數學者が數に對する態度と變はなし。いづれも之をそれ自身に法則を有する客觀的對象として見るのである *verités éternelles* とし

て見るのである。數が心理的と云はれぬと同一の理由に依つて、色自體も音自體も心理的とは云はれない。此處でも *quid facti* と *quid juris* との區別を嚴密にせねばならぬ。意識我 *Bewusstseinsich* と呼ばれたる一中心による内面的作用の範圍内に於て色や音の如何程の種類を如何程にまで識別し得るかとか、又此等の内容がその共立的關係に於て如何に變せられるかといふ如きことは純粹心理學の問題であらうと思ふが、*Farbenkörper* に於て考へられる様な純粹に色と色との性質的關係の如きものは寧ろ純粹心理學以外の性質を帯びるものではなからうか。心理學の問題の中心は意識我に於ける内容の結合即ちその共立的關係の問題でなければならぬ。識別的關係はその *sine qua non* である。心理學の感覺論に於てはキェルペの云つて居る如き *sensitivity and sensible dis crimination* の問題の如きものがその中心とならねばなるまい。斯くして此問題は考へ方によつては一方に生理學的研究と密接の關係を有つて來る。何となれば身體は意識我の射影なるが故である。我々は此變化の深き説明に於ては哲學的に進むにあらざれば、自然科學的に即ち生理學的に進まねばならぬのである。併し之を他に依つて説明し得ると否とに關らず、意識は意識としてそれ自身の領分を有つて居るのである。 *after image, contrast* などより幻覺や錯覺に至る



まで、それぞれ生理學説明があるとしても、兎に角直接經驗の事實としてそれ自身の變化の法則を有つて居るのである。種々なる心理學的法則といふのは右に述べた如き内容の共立的關係の法則である。充足理由の原理は矛盾律の中に求めることできぬ、内容の共立的關係の變化は内容自身の中に求めることはできぬから、此等の變化の背後に意識我なるものが考へられ、心理學的法則は此條件の下に於て現象を支配する法則と考へられる、即ち心理學的法則は内容自身が内面的結合を成す爲めの法則である。デュータインは *vergleichende Psychologie* と *beschreibende Psychologie* との區別をして居るが、分析的心理学といへども物理學などと異なつて、矢張り内容の内面的統一を離れたものではない、氏の所謂 *Struktur* の學問である、體驗を對象とした學問である、唯その體驗の最も一般的な成立條件を論ずるを以て氏の *beschreibende Psychologie* と異なつて居るのである。識別といふ如きことも體驗の初級である。或は意識内容の本質的關係は盡く本質學 *Wesenswissenschaft* に屬し、所謂意識我の本質といふ如きものも畢竟之を合理化し得ると信ずるならば、所謂意識はその獨立の實在性を失ふ様になるとも考へられるであらう。例へば或一つの數學の問題を考へた時、その眞なる部分は數學的眞理の必然に屬し、その誤つた部分と推論の順序方法などが心理

學的説明を待つと云ふこととなるかも知れない。併し此部分が實在の創造的部分である、エラン・ヴィタールの尖端である、實在は意志である。心理學は意志の奥底に向つて反省して行くのである、充足理由を求めつゝ行くのである。分析的心理学といへども此方向の初步である、聯想心理学といふもこの説明の初階たるを失はない、此點に於て心理学は自然科学と異なつて居る。普通の心理学は之より反對に生理学と結合するのであるが、右の方向を正しく進めば、*Dehntai*の *beschreibende Psychologie* の如き総合的心理学に達せねばならぬ。所謂心理学者の誤は分析的心理学を以て凡の精神科学の基礎であるかの様に考へるにあるのである、眞の *Götterbilder* のあるべき場所へ *Harven* を置かんとするにあるのである。心理学は物理的因果の學ではなくして内面的因果の學である、創造的意志の學である。心理学的説明の基にはいつでも人格的或物がなければならぬ、分析的心理学の場合でもそれが最も一般的であるといふに過ぎないのである。

### 三

以上論じた如く、感覺とは識別力を有つた表象自體である、表象自體が相互の識別

的關係に於て立つ時、それが感覺となる、即ち表象自體が識別的自我の中に入り來つたものが感覺である。主觀の方から云へば感覺は識別的自我の作用とも云ひ得るのである、識別的自我が感覺界の魂であると云つてよい。今日の認識論者の考の如く我々の客觀界とは直接經驗の内容を思惟によつて構成したものとすれば、ナトルプの云ふ如く感覺とは *letzta materiale Grundlage der Erfahrungserkenntnis, an sich nur das Unbestimmte erst zu Bestimmende = a, positiv aber das Bestimmbare oder die gegebene Möglichkeit der Bestimmungen welche die objective Erkenntnis gemäss den Gesetzen der synthetischen Einheit vollzieht*、といふべきであらう。直接經驗の内容を「すべての現象に於て感覺の對象たる實在者は内包量即ち程度を有つ」といふ知覺豫料の原理に當倣めて此方向を押し進めて行けば内包量は更に物力となり物理的世界に進むのであるが、翻つて之を元の立場に於て見たものが感覺である。此の如き逆の立場に於ての統一が精神作用となる。斯く考へればナトルプの考の如く客觀化的方向の種類のあるだけ精神作用の種類がある譯である。余は此點に於てナトルプの考と布伦ターノ學派の人々の對象的關係 *gegenständliche Beziehung* によつて精神作用を分つといふ考と結び付くことができると思ふ。實驗心理學者は布伦ターノ學派の心理學は概念を實體化するも

のとして之を排するのであるが、純粹心理學の立場に於ては意識現象に内在的なる意味内容の區別を無視することはできぬ。何となれば意識現象に於ては意味即實在なるが故である。精神現象は經驗されたものの經驗ではなくして、經驗するものの經驗である、意味の實在性に依つてのみ經驗が成立することができるのである。主觀とは經驗内容の統一者即ちアブリオリである。

現今の心理學者はその知識に對して批評的なると否とに關せず、精神的要素として感覺の性質的區別を立つるに當て、右の如き立場が守つて居ると考へることができさる。種々なる感覺の區別及びその細別の如きも現在我々の意識に於て幾許の表象自體が識別的關係に於て立ち得るか示したものである。併し感覺が性質の外に強度を有つとか又は種々の屬性を有するとは如何なることを意味するのであらうか。先づ感覺の強度 *Intensität* といふことに就て考へて見よう。心理學上に於ける量の概念は物理學上に於ける量の概念と異なつて居ることは心理學者自身も認め居る。元來性質的たるべき精神現象に嚴密なる意味に於て量の概念の用ゐらるべき筈はない、量的に考へるといふことは意識内容を客觀化することである、之を對象化することである、「知覺の豫料」の原理に當嵌めることである、數學的物理学は之

によつて成立するのである。心理學者自身も感覺の強度といふのは一種の性質と考へて居るのである。併し感覺の強度といふことを單なる一種の性質と見做すのも固よりその當を得たものではない。意識の強度とは判斷に對する意識内容の *aim* である、リッブスの云ふ如く我々の *Auffassungsfähigkeit* に對する内容の *Zumutung* である。コレーンは感覺を *Anspruch* とするが、強度とは感覺が識別的關係に於て己自身を維持する力である。此點に於てヴェントがヴェーバーの法則を統覺的結合の法則となすのは當を得たものである。すべてそれ自身に於て獨立なる實在は連續的でなければならぬ、即ち強度を有し力を有せねばならぬ。一方から考へればライプニッツが *imo extensione prius* と云つた如く、意識の強度は物力の強度よりも一層根本的であると考へることもできる。物理學者が物體の力を計るのも我々の感覺の強度を基とするのである。重量や溫度を秤や寒暖計に依つて計るといふも要する精確なる視覺の判斷に訴へるに過ぎない。意識の強度は物の強度を計るのである、意識の強度によつて物理的強度が成立するのである。意識現象はすべて一般者 *das Allgemeine* の自なる分化發展である、その背後には何時でも一般者がある、意識の強度とは此の如き一般者の發展の力を現はすものである。意識現象に於ては性質即強度

である、性質とは經驅内容が單に其物として靜的に考へられたもので、強度とはその動的狀態である。表象自體は強度を有することに依つて感覺となる。我々の直覺に於ては性質が強度を有つ、畫家はすべての性質を強度的に見るのである。物體現象に於ては之に反し質と量とは分れて二となる、熱とか光とかいふ性質を量的に考へるのである、質と量とは互に外面的である。勿論、向に云つて如く *physical measurement* が内包量に依るのみならず、物理的の量其物が主觀の構成によると云ふことができるのであるが、物理學的考へ方に於ては一般なるものと特殊なるものとは直に結合せない、即ち質と量とは直に結合せない。精神現象に於てはヘーゲルの概念に於ての様に部分が一々全體の意義を有つて居る、精神現象はアプリアリとアプリアリとの結合、作用と作用との統一である、質即量である。物理的世界に於ては量と質と分れ、量其物が獨立に實在性を有するが故に、數學を應用することができ、精神現象に於ては之と同一意義に於て數學を應用することはできぬ。併し物理的の量が一方から見れば主觀に依存すると云ひ得ると共に、心理的の量とは一方から見れば小なる立場から大なる立場への傾向、特殊的部分から一般的統一への推移、即ち客觀的傾向と云つてよい。而して我々の自我の最大統一は先驗的の自我の統一にあるとすれば、

リプスの "Zunehmung" は畢竟物理界を構成する先驗的自我への求心的傾向と云つてよい、精神量と物理量とは此點に於て結合するのである。我々は此先驗的自我の統一を通じて全經驗を反省し、之を物體界に射影して見ることができ、而して自我に對する "Zunehmung" なる精神量を物質量に對應することができるのである。

右に述べた如く感覺の強度とは意識内容の力である、感覺をして感覺たらしめるものはその強度を有するに依るのである。然らざれば感覺は單なる表象自體と擇ぶ所はない、感覺とは強度を有する表象自體と云つてよい。それでは感覺の性質が種々の屬性を有するとは何を意味するか。例へば色覺は *Farbenton* の外に *Farbgrund* と *Farbenhelligkeit* とを有するといふのは如何なることを意味するであらうか。赤の感覺はその色調の外に飽和度と光度とを有つて居るのは事實である、即ち赤の感覺はその色調の方向に配列し得ると共に飽和度や光度の方向にも配列することができ、向に云つた如く感覺は表象自體が實在的となつたものと云ひ得るならば、我々が色覺に於て色調と飽和度と光度とを概念的に分析し得るといふことから、色覺を更に此等の要素に區別し得ると考へられるかも知らぬ。併し嚴密に考へれば或一の色調に於て微細にその飽和度や光度を異にせる感覺はその一々が異なつた感

覺と考へねばならぬ。或一つの感覺が色調の外に飽和度や光度を有つといふことは一つの點が三次元に於て見られる如く、一つの感覺が種々の方向に於て比較し得るといふことに過ぎない。他面から考へれば一の感覺は種々なる性質的次元の結合點と考へることもできるであらう。勿論物體をも種々なる性質の結合と考へることができる、我々は之を物が性質を有つといふ。併し精神現象の統一と物體現象の統一とはその範疇を異にして居るのである。物體現象に於てはその統一は外面的である、時間空間に依つて結合されるのである。之に反し精神現象に於てはその統一は内面的である、空間時間による統一ではなくして性質的類似の統一によるのである。色覺か色調、飽和度、光度を有つといふのは時と場所とによる外面的結合ではない、色其物の性質による内面的結合である。此故に物體現象に於ては概念的統一は一は全く非實在的と考へられねばならぬであるが、精神現象に於ては概念的統一は實力を有すると考へることができる。余は此點に於てライブニツが *des idées simples* がないといふのは一面の眞理を認め得ると思ふ。無論ライブニツの考へた如き *le verd naïst du bleu et du jaune* といふ理由を以て緑を複雑と考へることはできなうが、一つの感覺は種々なる次元に於て推移の傾向を有つといふ意味に於て複雑と考へる



ことができるのである。一つの點や線が解析幾何學に於て種々の意義に解せられるのと一般である。緑の色覺は心理學的には單一なる感覺であつて黄と青との混合と見ることはできぬ即ち不可分的であらうが、性質的區別の體系に於ては種々の意味を有つと考へることができ、實在的には單一であるが意味的次元の上に於て多様であると考へることができ、而して精神現象に於ては意味は實在的である、意味的關係は物理現象に於て力學的關係の如く根本的である、識別的關係といふのは意味の力學的關係である。ヘーゲルは「美學」に於て *Einheit unterschiedener Bestimmtheit* として、概念は具體的であると云ひ、人とか青とかいふ表象も區別を其中に含むと見られたる時概念となると云つて居る (Wie z. B. die Vorstellung, blau, als Farbe die Einheit und zwar spezifische Einheit von Hell und Dunkel zu ihrem Begriffe hat, u. s. w. Aesthetik. I. S. 137.)。精神現象は此の如き概念の實在と考へ得るのである。すべて實在は一般者 *das Allgemeine* の自なる發展である實在は一つの獨立の體系でなければならぬ。經驗内容即ち純なる性質が單なる表象自體ではなく、感覺的性質としてそれ自身の實在性を有するには、それ自身の中に分化發展の動機を有する一般者でなければならぬ。換言すれば純なる性質的一般者 *das qualitative Allgemeine* がそれ自身に發展したものの即

ち具體的となつたものが感覺的性質である。感覺的性質の屬性といふのは此の如き性質的一般者の發展の種々なる方向に過ぎない、即ち性質的一般者の *Momente* である。感覺の強度といふのは之に反し種々なる性質的一般者の統一點たる自我に對する *Zumutung* である、性質的統一が更に深且つ大なる自我の統一の一部分となつた時、感覺は強度を有するのである。感覺は強度を有することに依つて、即ち性質的強度 *Grad* となることによつて眞に具體的なる精神的要素となると云つてよい。單に量的なる物理現象が抽象的なるが如く、強度なき感覺は精神現象として抽象的なることを免れない。具體的精神現象は性質的強度でなければならぬ。

精神的要素として考へられる感覺には必ず物體的條件が伴ふと考へ得るも、物體現象から精神現象が生ずるのではない。精神現象は物體現象に伴ふといふのは精神現象は何時でも物體界に投射して考へ得るといふに過ぎない。ライブニッツの *Monade's representation, expression* をその本質の一と爲すが如く、獨立にして自働的なる我々の自我は *representor* の力を有つて居らねばならぬ、自ら働くものは己自身を *representor* するものでなければならぬ。此の如き反省の方面が物體界である。我々は反省的自我の統一を通じてすべての經驗を物體界に映して見ることが出来る。感覺は

斯くして成立する物體界との接觸點である。平面的なる物體界と立體的なる精神界とが結合する境界に於て感覺は立體的方向に位するのである。